

## 田原本町

～アクセス向上を機会に賑わいと活力あふれるまちづくりを目指す～

奈良盆地の中央部に位置する磯城郡田原本町は、複数の河川にはさまれた平坦な地形に田畑や商工業施設、住宅が広がり、弥生時代の環濠集落遺跡「唐古・鍵遺跡」の存在でも全国的に知られています。同町は、住民の安全・安心に向けた取組みに加えて、大阪や関西国際空港等へのアクセス向上を機会ととらえて企業誘致や農業の高付加価値化に注力するほか、観光や交流の促進に向けた取組みにも力を入れており、以下では賑わいと活力あふれるまちづくりに向けた同町の取組みを紹介します。

### I 概要

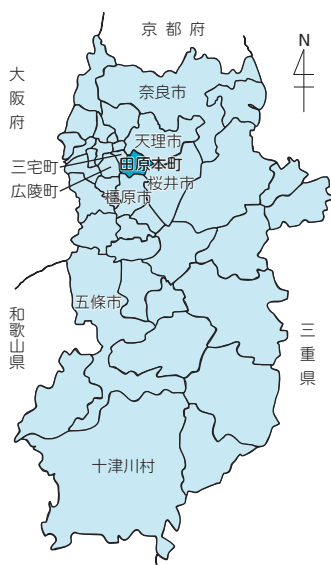
#### 1. 地理・歴史

磯城郡田原本町は、奈良盆地の中央部に位置する人口 31,691 人（県内 39 市町村中 11 位）、世帯数 11,463 世帯（同 10 位）、面積 21.09km<sup>2</sup>（同 29 位）の町である（総務省「国勢調査 人口等基本集計」（2015 年））。同町は 1889 年、町村制の施行に伴い田原本町として発足、1956 年に周囲の 4 村を編入後、翌年、翌々年に一部が橿原市、天理市に編入され、現在の姿となった。

町域全体に田畑が広がる平坦な地形で、幹線道路沿いに商工業施設が集まり、町の東部を大和川（初瀬川）、中央部を寺川、西部を飛鳥川、曽我川が北流している。

長年にわたり県内交通の背骨の役割を果たしてきた国道 24 号が町の中央部を南北に走り、西部にはそのバイパス機能を担う京奈和自動車道および橿原バイパスが並走する。これらに挟まれるように近鉄橿原線が南北に走り、町の中心部に田原本駅が、その約 50 m 西には王寺方面

田原本町の位置図



に向かう近鉄田原本線の西田原本駅があり、朝夕は通勤、通学の乗換客が多数乗降する。戦前には西田原本駅から桜井にかけても鉄道が伸びていたが、第二次世界大戦中に営業停止、その後廃線となり、今は廃線跡が県道となっている。

田原本駅周辺の市街地は街路が碁盤の目に伸び、「魚町」「市町」「材木町」などの地名が残っており、かつてこの周辺が水陸交通の要衝だったことが窺い知れる。

町内には弥生時代の環濠集落遺跡「唐古・鍵遺跡」があり、大型建物や高床・竪穴住居、木器貯蔵穴、井戸、区画溝などの遺構とともに、銅鐸の鋳型、褐鉄鉾容器に入ったヒスイの勾玉、楼閣が描かれた絵画土器などが出土している。1994 年には、土器に描かれていた絵をもとに、2 階建ての楼閣が遺跡内の唐古池に復元された。



唐古・鍵遺跡の復元楼閣

#### 2. 産業構造

従業地による就業者人口（15 歳以上）の産業別割合を見ると、第 1 次産業が 4.3%、第 2 次産業が 26.4%、第 3 次産業が 69.2%と、奈良県全体（順に 3.4%、22.2%、74.4%）に比べ、第 1 次産業および第 2 次産業の割合が高い（総務省「国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（2015 年））。

農業経営体は607経営体（県内9位）あり、経営耕地面積は561ha（同7位）と町面積の26.6%を占めている（農林水産省「農林業センサス」（2015年））。稲作を中心に、なす、ほうれん草などの葉物野菜、いちごに加え、「大和の伝統野菜」に認定された<sup>あじま</sup>味間いもなどが栽培されている。

民営事業所数は1,121か所（県内12位）あり、従業者数は11,167人（同10位）。従業者数の多い産業（産業中分類別）は、飲食料品小売業（1,007人）、社会保険・社会福祉・介護事業（995人）、医療業（577人）の順となっている（総務省「経済センサス活動調査」（2016年））。

なお、製造業の製造品出荷額等（従業者4人以上）は678億円（県内9位）となっている（経済産業省「工業統計表 市区町村編」（2018年））。

### 3. 人口構造

同町の人口は、2005年の33,029人をピークに、直近（2015年）は31,691人と減少傾向に転じている。

一方、年齢階級別人口移動（2010年→2015年）を見ると、5歳以上の人口は25名の転入超過となっている（総務省「国勢調査 移動人口の男女・年齢等集計」（2015年））。20歳代前半で転出超過が大きいことを除けば、39歳以下全般で転入超過となっており、特に30歳代前半で転入超過が大きい。

この結果、年齢階級別構成割合では、14歳以下が12.9%（県内9位）、15～64歳が58.2%（同14位）、65歳以上が29.0%（同28位）と、相対的に若年層の人口割合が高い特徴がある。

## II 町の活性化に向けた様々な取り組み

以下では、田原本町の活性化に向けた様々な取り組みについて紹介する。

### 1. 安全・安心にかかる取り組み

#### ○中学校給食開始

同町では町の新しい未来の一つとして「子育てしやすい未来」を掲げ、子どもを育てやすい環境の整備に力を入れている。

近年、食育の推進が大きな課題となる中、望ま

しい食習慣の形成や食に関する知識と食を選択する力を身につける必要があることから、2019年度2学期より中学校でも給食を開始した。

給食施設は町立中学校2校それぞれの敷地内に設置されており、学校給食衛生管理基準に準拠し、調理場はドライシステムに対応。HACCPに基づいた衛生管理、食物アレルギーに対応した特別エリアの設置等、安全で安心な学校給食を提供している。また、両中学校は指定避難所にもなっており、調理場は万一の災害時には炊き出し場としての活用が可能である。

#### ○タワラモントンタクシー利用料金助成制度

同町では2010年より、高齢者など移動に困難を伴う住民のための地域の交通手段として、デマンド型乗合タクシー「ももたろう号」を運行してきた。しかし、事前予約が必要で運行台数も少ないなど課題も多く、利用者は一部の住民に限られていた。そこで2018年7月より制度を見直し、通常タクシー初乗り料金を助成するタクシー利用券を、70歳以上の高齢者、障害者、未就学児等に交付する「タワラモントンタクシー」に切り替えた。

月平均の利用回数は、ももたろう号の5倍で推移。同町は、免許返納制度や健康づくり活動等、他の事業と連携して利用の促進を図り、町の行事への参加率が高まるなどの効果も現れている。



利用登録証（左上）、利用券（左下）、利用可能なタクシーに貼られるステッカー（右）

### 2. 産業振興にかかる取り組み

#### ○企業誘致

2015年3月の京奈和自動車道の三宅IC開通により、同町の交通アクセスは格段に向上した。今後、御所・和歌山方面へ接続する田原本ICの設置も予定されており、道路交通の利便性のさらなる向上が期待されている。

これを受け、同町では田原本 IC 予定地付近の土地およそ 27ha を市街化区域に編入し企業誘致を推進しており、固定資産税の課税免除（3 年間）や各種奨励金等、町独自の優遇制度も用意。2011 年以降で 13 件の企業誘致を実現している。さらに引き続き工場の立地ニーズが多くあることから、同町は奈良県と連携協定を結び、西竹田・十六面地区において新たな工業ゾーン創出に取り組んでいる。

また、国道 24 号の唐古交差点周辺では古くから工場、商業施設、沿道サービス施設が立地しており、京奈和自動車道の三宅 IC にも近く、さらなる発展が見込まれることから土地利用規制の緩和を進めるべく地区計画の決定に向けた取り組みを進めている。

## ○官民連携で奈良県最古の醤油復活に取り組む

町内の伊与戸地区では、70 年前に閉業した醤油蔵元屋敷を再生させ、330 年の歴史ある県内最古の天然醸造醤油の復活に取り組んでおり、商工会、自治会、町等で田原本町川東地域資源活用協議会を立ち上げ、醸造蔵、宿泊施設、レストランの整備を進めている。

同事業は、奈良県の「もっと良くなる奈良県市町村応援補助金」および総務省の「地域経済循環創造事業交付金」（ローカル 10,000 プロジェクト）を活用し、2020 年度の宿泊事業開始を目指している。



天然醸造醤油の復活を目指す

## 3. 農業振興にかかる取り組み

同町では農業を地域の主要産業の一つと捉え、農業振興にも力を入れている。

### ○新規就農の促進

新規就農を促進するため、国の補助制度とは別

に町独自の支援も行っている。特定の推進作物を対象とした補助では、イチゴ、ナス、トマトなどについては 10a あたり 5,000 円を、<sup>あじま</sup>味間いも※1、小麦については 10a あたり 10,000 円の補助を実施。また GAP※2 認証の取得に対しても、1 認証につき 10 万円の補助を実施している。

※1：「大和の伝統野菜」に認定された里芋。

※2：GAP（農業生産工程管理）：農業における食品安全、環境保全、労働安全など持続可能性を確保するための生産工程管理の取組み

国による様々な補助制度も活用し、2015 年度から 2018 年度の 4 年間で、50 歳未満の認定新規就農者は 4 名となった。同町は今後、若者だけでなく、勤務先を定年退職した農家の子息など、アクティブシニアの就農にも期待を寄せている。

### ○農業の高付加価値化

また、町内の八田および法貴寺の 2 地区が奈良県の特定農業振興ゾーンに設定されており、同町は県と連携して営農の効率化や意欲ある担い手への農地の集約化等を通じて、高収益作物の規模拡大、生産性向上を支援する。

さらに今年 5 月には、京都大学経営管理大学院経営研究センターと連携協定を締結。持続可能な地域活性化を目指して、農産品を中心とした学術的アプローチによる地域ブランディング戦略の立案や商業施設・地域商品等のマーケティング調査分析、地域創生に関する学びの場としてのセミナー実施等にも取り組む。

関西国際空港で町産のイチゴ『古都華』を販売すると、1 パック 1,000 円の高価格商品から売れるという。同町の<sup>もりあきひろ</sup>森章浩町長は、「田原本 IC が開業すれば関空への利便性も高まることから、海外輸出も視野に入れ、高付加価値農産物の栽培や 6 次産業化で農業を成長産業化したい」と語る。

## 4. 観光振興・交流促進にかかる取り組み

### ○唐古・鍵遺跡と道の駅「レスティ唐古・鍵」

町内にある「唐古・鍵遺跡」は、弥生時代の大規模環壕集落遺跡として全国的に有名。遺跡の一部は「唐古・鍵遺跡 史跡公園」として整備され、



同町の代表的な観光資源の一つとなっている。

2018年4月には、同公園に隣接する形で道の駅「レスティ唐古・鍵」がオープン。様々なイベントを開催するとともに、田原本町内の新鮮な野菜、果物、花をはじめ、地元や県下の特産品を多数販売している。県立磯城野高校と道の駅とがコラボした、味間いものコロッケを挟んだ「磯城野レスティバーガー」(土日祝日限定)も楽しめる。



道の駅レスティ唐古・鍵(左)、磯城野レスティバーガー(上)

#### ○ふるさと納税型クラウドファンディングを活用して流鏑馬まつり開催に挑戦

流鏑馬の歴史が記された「長川流鏑馬日記(1384年)」によると、同町を拠点としていた武士団である長谷川党が法貴寺を出発し、春日若宮おん祭に「流鏑馬」を奉納していたことが記述されている。

この流鏑馬を蘇らせるため同町は実行委員会を立ち上げ「流鏑馬まつり」を企画し、同町初となるふるさと納税を利用したクラウドファンディングで資金調達を行った。今年12月1日、唐古・鍵遺跡史跡公園での開催に向けて準備を進めている。

#### ○ご当地ナンバー「飛鳥」の導入

飛鳥川沿いの田原本町、橿原市、高取町、明日香村、三宅町の5市町村で、地域連携のシンボルとしてご当地ナンバー「飛鳥」の導入が決定している。飛鳥を象徴する朱雀が羽ばたく様子を赤やオレンジの明るい色合いで描いたデザイン。「この地域が朱雀のように飛躍するように」との願いが込められており、2020年度中の交付開始を予定している。



朱雀をあしらった飛鳥ナンバー

#### ○東京五輪に係るグアテマラのホストタウンに

田原本町は、2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックに係り、グアテマラ共和国の事後交流型ホストタウンに登録され、五輪後、選手団が町を訪問する。中央アメリカ北部にあるグアテマラは、マヤ文明が栄えた地であり、田原本町も弥生時代の環濠集落跡、唐古・鍵遺跡を有する。また、コーヒー栽培が盛んなことでも知られるグアテマラに対し、同町はUCC上島珈琲株式会社の創業者の出身地であるなど、「古代文明・文化」と「コーヒー」をキーワードに、選手団と住民・子ども達との文化・スポーツを通じた交流が検討されている。



握手する森町長とアギーレ GOC(グアテマラオリンピック委員会)会長

#### ○五代友厚の妻・豊子の里として

大阪商工会議所(現在の大阪商工会議所)の初代会頭で、大阪経済の発展に貢献した五代友厚。友厚を支えた妻・豊子の出身地が田原本町である。

現在、友厚を主人公とした映画を製作する「五代友厚プロジェクト」が進行中であり、同町も同プロジェクトに協賛するなど、豊子の出身地であることを活かしたプロモーションを検討している。



五代豊子肖像写真(稲岡正子氏提供)

田原本町は、大阪や関空等へのさらなるアクセス向上を見込み、企業誘致や農業の高付加価値化に注力している。また近年では、観光振興や交流促進にかかる取組みにも力を入れており、今後町が注目を集める機会も増える見込まれる。

森町長は、「行政として民間の参画を呼び込むような仕組みづくりを行い、民間の創意工夫を促すとともにその活力を最大限に引き出すことで、地域活性化を果たしていきたい」と語る。

(太田宜志、前田 徹)